

かくして大光明思想は完成した

2011年5月22日 於：神奈川集会

かくして大光明思想は完成した

【想念の法則、心の法則、因果法則は同じ意味で、業の法則にすぎない】

「想念の法則」を利用して運命を改善しようとする人は、自分の未来を「こうありたい」「こうなりたい」「こうしたい」と強く念願し希望し続けるならば、想いの法則の通り必ず成就するものなのであると説いています。これは昔から仏教で説かれていた因縁因果の法則を「想念の法則」とか「心の法則」という新しい言葉で言い換えたにすぎず、これらは神の法則ではなく、業の法則にすぎないのです。

【願望がすべて成就されることはない】

ところが、想念法則論者がいくら「あなたは成功するのだ」と説いても、願望が成就される人もいる反面、願望が成就されない人も出てきます。現実には病気や自己や災難に遭っている人がいるわけです。その人たちは、「私は健康だけを願っている、事故を欲してはいない、災難などに遭いたいとは思っていない。だけど病気です。事故に遭いました。災難に遭いました」と主張します。

【想念法則論者は、相手のせいにして、相手を責める】

すると想念法則論者は、「あなたが希望の目標を実現できないのは、目標が実現される前に、待ちきれなくて目標を投げ捨ててしまっているか、または成功するという信念をなくしてしまったか、成功するための行為を棄ててしまったかによるのです」と答えます。つまり、「あなたが成功できないのはあなたの信念が弱いからなのだ」と相手のせいにするのです。

【想念法則論の成功法則は、恐怖法則に一転する】

さらに、「『何かを恐れれば恐怖の対象を創造してしまう』という想念の法則によって、あなたが病気、事故、災難を恐れているから、あなたは病気、事故、災難に遭うのだ」と説くのです。最初は因縁因果の法則の善の面だけ、成功法則の面だけを説いていても、現実の失敗に対して、このように「恐怖は恐怖を呼ぶ」という想念の法則の悪因悪果という暗黒面を説明しないわけにはゆかなくなるのです。とどのつまりは、「あなたが病気になったり事故や災難に遭ったりするのはあなたが悪いのだ」と人を責めることになってしまうのです。

【想念法則論で業想念を「無い」と否定する方法】

そして、このままでは人を責めることになってしまうと気づいた想念法則論者は、ひたすら善念だけを徹底して潜在意識に叩き込むという方法を考えます。そのために病気、事

故、災難といった否定的な言葉や想念を否定して打ち消そうとする方法を思いつきます。たとえば「病気はない」「事故はない」「災難はない」と否定する方法です。しかし、病気、事故、災難という言葉を使っているのですから、いくら「無い、無い」と唱えても、否定的な言葉がつきまといまいます。

【想念法則論で真理の言葉を“I am ~”と宣言する方法】

そこで、もっとよい積極的な方法はないかと考えて、「私は完全に健康である」「私は安全である」「私は幸福である」という真理の言葉を宣言する方法を思いつきます。「そうだ、これ以上の方法はない。病気、事故、災難は消えてゆく姿と否定しているうちは、病気、事故、災難という言葉を使っているから、まだ完全な光明思想にはなっていない。真理の言葉を宣言してこそ完全な光明思想になるのだ」と法則論者は考えるのです。

完全な健康、完全な安全、完全な幸福、完全な富、完全な能力、これらを一つの言葉に言い表すと、「私は完全である」「I am a Perfect」、すなわち「私は神の子である」「I am Son of God」という言葉になります。そこで、「私は神の子である、私は神の子である」と宣言し、唱え続けていけば、想念の法則によって神の子の完全な人間が現れてくるはずだと考えるのです。

【業波動の法則圏内で真理が現れることはない】

しかし、私から見ますと、そのような法則論者は真理に把われた迷妄者として映りません。「私は神の子である」と宣言したり「私は完全である」と唱えても、そう易々と神の子の姿が顕現されてきたり、完全な人間になったりはいたしません。なぜかと言いますと、業想念波動はそんなに甘いものではないからです。どんなに善念を思っても、業波動の圧倒的な力で善念を押しつぶしてしまうのです。想念法則論者は、いかにも簡単に、「『私は神の子である』と宣言すれば神の子になれる」「『私は完全である』と唱えれば私は完全になれる」と説きますが、そのように説いている指導者自身、何年やっても神の子になっていませんし、完全な人間にもなってはいません。「こうしたら多分なれるだろう」と推測してやっているにすぎないのです。私ははっきり断言しますが、そのような方法では決して神の子にはなれません。完全な人間にはなれません。業想念の力を無視した自力の方法では神の子にはなれないのです。

【神の子論を説いた宗教者が新たに想念法則論を説く場合】

初めは「神の子論」を説いた宗教者が、現実の業の存在を実相論から「無い、無い」と説いても、多くの人々は「業はない」とは思えないのですから、「神の子論」「実相一元論」では説明しきれなくなって、「想念法則論」を持ち出して、「神の子論」と「想念法則論」の二元論になってしまうのです。「想念法則論」は、善因善果、悪因悪果が存在していて、人間は善の行為をするけれども悪の行為もする存在と見るのです。つまり、「人間は完全な神の子ではない」という前提が「想念法則論」にはあるのです。言いかえれば、「人間は完全な神の子ではない」と思っているから、ことさらに「悪いことを想うまい、善の想念を想おう」とするわけです。完全な神の子が悪いことを想ったり悪いことをする

わけがないからです。従って、「神の子論」と「想念法則論」の二つを合わせて説けば矛盾した二元論になってしまうのです。

【想念法則論を説いた宗教者が新たに神の子論を説く場合】

その逆に、初めは「想念法則論」だけを説いていた宗教者が、善の想念を念じるうち、「人間は神の子である」という真理の言葉を念じるように教えてゆく場合もあります。しかし、低い想念波動の世界の中で、「私は神の子である」と念じることによって神の子になろうとしているわけですから、いつまでやっても、やはり神の子にはなれません。想念の法則は業生の法則であるのですから、神の子にはなれないのです。却って偽善者になってゆき、神の子の本心を厚い偽善の皮で覆っていつてしまうのです。

【自力による想念変換法と他力による想念変換法】

暗黒想念から積極想念へと想念を転換しようとするのですが、次々と押し寄せる業波動に呑み込まれて、自力で想念を転換することは不可能と置いていくくらい難しいことなのです。それに対して私の「想念波動変換原理」は、自力で業想念を善想念に変換するのではなくて、守護の神霊のみ心の中で想念を変換していただく方法です。「神様、お願いします。この想念をお浄めして下さい。世界人類が平和でありますように」と捧げ入れるだけでいいのです。電気洗濯機に服を投げ入れれば、後は自動で服が洗濯されるように、守護の神霊のみ心の中で業想念波動が光明波動に変換されて、「有難い」という光明波動となって私たちに還ってくるのです。

【光明思想とは積極思想でも真理偏重思想でもなく、理想と現実をつなぐ中庸光明思想】

五井先生の光明思想とは、想念の法則を利用した積極思想ではありません。無理無理に真理の言葉を宣言する、理想に偏り、現実を無視した神の子論でもありません。五井先生の光明思想とは、理想と現実を一つに結んだ中庸の神の子論であるのです。それがすなわち「消えてゆく姿」の教えであるのです。「業想念は現実には存在している」と現実を認めた上で、「しかし、この現在の業想念は時間が経てば消えてゆくのであり、未来には一切なくなるのだ」と時間の要素を加えて、無理なく業想念を否定するのです。このように「消えてゆく姿」という言葉で業想念を否定すれば、「業はない」というような無理をすることなく、現実に正直に生きられて、しかも理想にも矛盾しない中庸の生き方ができてくるのです。

五井先生の光明思想には、「想念の法則」「心の法則」を利用した教えは一切ありません。また、「業はない、悪はない、病気はない、地震はない、災害はない、不幸はない。私は完全である、私は神の子である」というような「理想に片寄った神の子論」でもありません。五井先生の光明思想は、「業は消えてゆく姿」と、時間の経過と共に徐々に業を否定してゆき、未来において人間本来の神の子の姿が現れてくるのだと説いているのです。ですから、現実と理想をつないだ光明思想と言うのです。この中庸の光明思想こそ、自分を責めず、人も責めず、自ずと自分を赦し人を赦せて、少しも力む必要がなく、偽善とならず、正直に、楽に明るく生きることのできる素晴らしい光明思想であるのです。

【「世界平和の祈り」の出現は中庸光明思想をさらに大光明思想へと完成させた】

その「消えてゆく姿」の業想念中庸否定法に加えて、守護の神霊に向かって「世界平和の祈り」を祈れば、救世の大光明によって業想念を浄めていただき、私たち人間の本体を顕現していただけるのですから、五井先生の光明思想の行法としては「世界平和の祈り」一つだけであるのです。五井先生の光明思想の具体的な実践法とは「世界平和の祈り」を祈ることであり、「世界平和の祈り」以外に光明思想の行法は不要であり、「世界平和の祈り」が神の子の本体を顕現する最も効果的な方法であるのです。

「私は神の子である」とことさらに言わなくとも、黙っていても純粋な愛の行為をしている人は神の子を顕現している人です。「神は愛なり、愛は神なり」であるからです。それと同様に、人類愛の祈りである「世界平和の祈り」をしている人は、ことさらに言わなくとも神の子の行為をしている人であるのです。「世界平和の祈り」をしていれば、偉ぶらず、偽善者ぶらず、嘘をつかず、正直に、力まずに明るく自然に神我一体になってゆくのであります。このように救世の大光明によって人類の想念を光明化するところから、五井先生の光明思想を私は「大光明思想」と名付けているのです。

誤てる宗教への批判は神の言葉

「世界が祈り言を統一するよりも、まずは心一つにすることが大切なのではないか」ということを主張される方もいらっしゃるようですが、私は、人類の心一つにするには、「心一つにしよう」と念じただけではとても不可能だと思います。人類の心一つに結ぶためには、やはり「合言葉」が必要であると私は思います。もちろんその目的は人類の心一つにすることです。その目的を達成する方法として、個々の祈り言とは別に共通の統一された祈り言がぜひとも必要であると思うのです。共通の祈り言を祈ることによって心が一つに融合されてゆくものと私は考えているのです。共通の合言葉がなくては、人類の心一つにすることは不可能であると私は思います。もちろんこれは私の意見です。他の方が「祈り言を統一する必要がない」と主張することはご自由です。

それから、「森島先生が人の悪口をすところがすごく嫌だ」という人がいるようですが、それはその人の大変な誤解です。私は植芝盛平先生の悪口を一度も書いたことはありません。それは過去のログをご覧になればお分かりのはずです。どこにも私は植芝盛平先生に対する悪口を書いておりません。また、私は「昌美先生の教えは間違っている」と批判しておりますが、それは悪口ではありません。何度も申しますように、批判と悪口は違うのです。五井先生のご本をよく読まず、「五井先生は一切批判をされないに決まっている」と先入観念を勝手に持っている人が、批判と悪口の区別が判らずに、私がいかに悪口を言っているように誤解しているのです。誤てる宗教に対する五井先生のご批判の烈しさは、それこそ烈火のごとく、雷が落ちるのごとく、机をこぶしで叩いてお怒りになるのであって、私のような甘い批判ではありません。そうした真実も、五井先生のご本を読ま

ない人が理解できるはずがありません。いつも申しますように、「偉そうなことを言う前に五井先生のご本をすべて読みなさい」と私は言いたいのです。私は誤てる宗教に対する批判は決して止めません。誤った宗教を批判する私の言葉は神の言葉であるのです。

私は他の宗教を冒瀆する発言はしてはおりません。神を冒瀆する誤てる宗教を批判しているのです。批判するならば、神を冒瀆する誤てる宗教家に対してこそ批判するべきなのです。「批判をしているから」といって、批判の内容を見極めずに、ただ私を批判するのは誤りです。そういったレベルで私を批判することは神を批判することであり、神を冒瀆することであるのです。

私を批判する人には、私に対する誤った偏見があるのです。私を批判する人でも、「心をつにすることが大切」と思っている人が多いようですから、その人はまず最初に私と心をつにすべきです。他の人の意見に惑わされずに、ご自分の心を澄まして、どちらが正しいかを判断することです。

質疑応答 1：白光真宏会と唯一会の違いと共通点

学生時代は宗教に熱中できても、社会人になりますと時間的な余裕がなくなりますから、どうしても現実の社会生活に追われて、信仰生活を続けてゆくことを忘れてゆくものです。そんな人たちが何気なく唯一会のホームページを読んで、忘れかけていた天命を思い出し、若い頃の祈りへの情熱がよみがえってきて、再び「世界平和の祈り」を祈り始めるという人が私たちのグループには多いのです。それはまるでタイムカプセルの中で長い間眠っていた人たちが、定められた時刻が来てカプセルが自動的に開かれ、眠りから目覚めて崇高な使命を果たすというSF映画を見るようです。「世界平和の祈り」を祈る使命を持った人々がこれからは続々と現れてくるに違いありません。本当に嬉しく思います。

また、書店で五井先生のご本を読み、感銘を受けた人が、私のところに電話をしてくることが以前は度々ありました。「私の住んでいるところに近い白光真宏会の支部を教えてください」という内容が多く、私は自分の意見を何も言わずに、受付嬢のように白光真宏会の支部や集会を教えてあげておりました。すると数週間して、また同じ方からお電話がきまして、「白光真宏会の支部や集会に行ってみました、五井先生のご本に書いてある内容と白光真宏会が現在行なっている教えとはまるで異なっていてとまどいました。白光真宏会の講師のお話を聞いたり、支部の会員の人の話を聞きましたが、五井先生のご本の内容と実際の白光真宏会の内容がどうも違っている気がするんです」と語るのです。そして、「唯一会ではどのように教えているのですか？」と尋ねられるので、「私たちは五井先生の教えを継承し、五井先生が教えて下さった世界平和の祈りだけを実行しているんです。他の行法はやっておりません」と答えると、「森島さんの教えの方が五井先生の教えのままで正しいと思います。世界平和の祈りだけでいいと私も思うのです」と相手の人もうなずいて下さるのです。

何も私は白光真宏会の悪口を言っているわけではありません。このように、五井先生の

ご本を読んだ方々の中で現在の白光真宏会の教え方について疑問を持っている人が多いという現実を知るべきだと思うのです。この現実の批判を無視するのは構いませんが、無視し続けたら、白光真宏会の会員は増えることはありません。お客さまの声を聞き、耳が痛くとも批判の声に耳を傾けなくては企業は発展しないように、宗教団体も信者の皆さんの声に耳を傾けなくては決して発展することはありません。信者の皆さんのご意見やご批判に耳を傾けず、トップダウンだけの指導法では必ず行き詰まる日がきます。

唯一会は新しい故に無名で会員数も少なく、私も無名の人間なのに、「五井先生の教えを今も守っている唯一会の方が私は正しいと思います」とお電話を下さる人が多いのです。毎日のようにこんな内容の電話が続きますと、現在の白光真宏会がまるで砂上の楼閣のように見えてくるのです。そして、私は大いに励まされるのです。皆さんから励ましのお電話やメールがくるたびに、「ああ、唯一会を設立してよかったなあ。こんなに私を支持してくれる人がいるんだ。有難いなあ」と嬉しく思います。

「世界平和の祈り」を唯一の行とする人たちは日々増えています。唯一会に賛同して下さる人たちも、日々全国的に増えています。「世界平和の祈り」の大光明力は日々強大になっているのです。

【ご質問-1】〔唯一会は白光真宏会のしていることを認めているのか〕

唯一会は、今の白光真宏会のしていることを部分的には認めているのですか。

【お答え-1】〔昌美先生が創案した行法は五井先生の教義に反する〕

唯一会は、五井先生ご在世時代の過去の白光真宏会と同じとお考えになってよろしいのです。唯一会は五井先生の教義と「消えてゆく姿で世界平和の祈り」という行法を今も守り継承しております。従いまして、当然ですが、現在の白光真宏会に残っている「世界平和の祈り」は正しいと認めております。但し、「世界平和の祈り」以外の行法については正しい行法であるとは認めてはおりません。すなわち、昌美先生が新たに創案した「光明思想徹底行」「非光明思想消滅行（自己否定消滅行）」「地球世界感謝行」「我即神也、人即神也、人類即神也の真理宣言行と印の行」「願望成就宣言行」「心の法則を用いた積極思考行」「宇宙神マンダラ謹書行」等の行法については、感謝行を除いて、「世界平和の祈り」よりも遙かに劣る行法であり、五井先生の教義に反する行であると思います。その理由は、それらのすべての行法が真理の言葉に把われた行法であり、業生の法則に把われた行法であるからです。

唯一会は、子供からお年寄りまで誰でも易しく実行できる他力易行道で、「世界平和の祈り」の行法だけで救われると説いているのですから、将来は唯一会の会員数が白光真宏会の会員数を遙かに上回ることになるのは自然の成り行きでしょう。私どもを侮り、無視し馬鹿にしていた人たちも、そのとき初めて瞠目して、「世界平和の祈り」の強大な力を改めて見直すことになるのです。

【ご質問-2】 [今の会長は五井氏の生前のご遺志ではなかったのか]

五井昌久氏は、今の会長昌美氏が違った方向に行くであろうことを予感しながらも、あえてご自分の後継者として昌美氏を指名されたのでしょうか。それとも、今の会長は五井氏の生前のご遺志ではなかったのですか。

【お答え-2】 [神様にとって世界平和の祈りを説かない宗教者は必要のない存在]

昌美先生を白光真宏会会長の後継者としたのは五井先生のご遺志です。生前の五井先生は昌美先生を誰よりも可愛がっておられましたし、「私の教えを昌美は忠実に継承してくれるだろう」と五井先生は思っていたことでしょう。昌美先生がよもや現在のような指導法に変更するとは、五井先生は夢にも思わなかったと思います。器（肉体）の五井先生の方は何の不安もなかったのです。

五井先生の他界された 1980 年（昭和 55 年）から 1990 年頃までの十年間は、昌美先生は確かに五井先生の後継者であったのです。故人となられた瀬木庸介理事長がピースポールを発案された功績は多大なものがありますが、昌美先生が始められた「世界各国の平和の祈り」というセレモニーも、祈りによる世界平和運動を大きく発展させた素晴らしいアイデアだったと言えます。しかし、五井先生の教えを継承するという天命は、1990 年頃を境にして昌美先生から私へと移ってしまったのです。なぜならば、昌美先生は五井先生の提唱された「世界平和の祈り」を理解できず、欧米の念力思想や心の法則論の本の影響を受けて「世界平和の祈り」以外の行法を次々と編み出し、いつしか五井先生の教義から逸脱してしまったからです。それをご覧になっていた神様（救世の大光明霊団）は、1990 年頃、それまで何も分からなかった私にインスピレーションを送って私を悟らせて下さり、五井先生のみ教えを説くように私を導いて下さったのです。

神様は、過去世からの徳や現世の心境や才能を見て人間に天命を与えて下さるのですが、人間が神様のみ心に反することをし、暫く経っても改めないでおりますと、神様は義理や人情では動きませんから、パッと天命の配役を変えてしまうのです。神様は雇われのガードマンではないのですから、人間の都合のいいように神様を動かすことはできません。その人に天命を授けるのはあくまでも神様の方であるのです。会社の社長が経営者としてふさわしくなければ、大株主や重役たちによって退任に追い込まれることがあるように、神様からご覧になって「もうこの人間はこの役目を果たせない」と判断されると、それまで護っていた人間から即座に離れて、神様のみ心を伝えることのできる人間の背後に移るのです。

神様（救世の大光明霊団）が背後につきますと、その人は突然神様のみ心が分かってくるなり、宗教の講話ができるようになってくるのです。私もその一人であるのです。前世の徳で宗教教団の教祖の地位を得た指導者といえども、大悟していなければ、常に反省をして神様のみ心にかなうように行動しておりませんと、折角ついた神様が離れて霊力を失い、ただ形骸だけが残ることになってしまうのです。救世の大光明霊団にとっては、「世界平和の祈り」を伝えることのできる宗教者こそ必要なのであって、「世界平和の祈り」を説

かない者は宗教者として必要のない者であるのです。

【ご質問-3】〔印をやる会と祈りだけをする会をつくることに不誠実な感じを受けるが…〕

五井氏は宗教宗派の垣根を低くするために、どこの宗教の人でも参加できるように「平和の祈り」だけにされたと思いますが、「印」が出てくると却って宗教の垣根が高くなり、敷居が高くなると思います。宗教の垣根が高くなった分、別団体と言ってWPPSを造ることは二枚舌を使っているように思いますが、このことについて森島さんはどう思われますか。

【お答え-3】〔そのような矛盾したやり方では、いつまでも上手くゆくはずがない〕

あなたのおっしゃる通り、昌美先生のなさっていることは矛盾していると思います。一人の人間が片方で「人類即神也こそ究極の方法だ」と説き、他方で「世界平和の祈りこそ究極の方法だ」と説いて一人二役を演じているわけですが、このような矛盾した二元論の状況がいつまでも続くはずがありません。いずれ二つの矛盾が表面に露呈して消えてゆく姿となることでしょう。

【ご質問-4】〔他の宗教にも賛同者がいると言いながら他の宗教を悪く言うのは……〕

WPPSは他の宗教宗派にも賛同者が多くいると言っていますが、一方、白光真宏会の方ではキリスト教やイスラム教はやがて消えてゆく宗教と言い、それらの宗教は宗教戦争の基になっていると言っていますが、一体どうなっているのでしょうか。

【お答え-4】〔世界平和の祈りによって各宗教の教えが現代に生かされると言うべき〕

あなたのおっしゃる通り、昌美先生のご発言は矛盾していると思います。他の宗教宗派の悪口は避けるべきでありまして、「世界平和の祈りによって世界の各宗教の教えが現代に生かされる」というような言い方をすべきだと思います。

【ご質問-5】〔白光誌でマザーテレサと会談したことなどが報じられているが…〕

キリスト教の宣教師、シスターの中にも多くの立派な神の器がいると思います。『白光』誌の広報の中でマザーテレサと会談したことなど報じられていますが、これについて森島さんはどう思われますか。

【お答え-5】〔趣旨は説明しても、会談というほど長い話し合いはなかったのでは〕

もちろんクリスチャンの中にも立派な方は大勢いらっしゃいます。マザーテレサには会員からピースポールが贈呈され、マザーテレサの教会にピースポールは建立されています。ピースポール贈呈に当たってその主旨を説明しているはずですが、会談というほど長い話し合いはなかったと思います。

【ご質問-6】〔現在の白光の広報を見ると宗教が商品化されているように感じる〕

他にも著名人が今の会長と会談したことなどを宣伝文句に使うのは、他の宗教団体の常套手段だと思います。前会長の時代はそのようなことはなかったと思います。このような広報の仕方は、多分に、米国でアドバタイズ（広告宣伝）やマーケティング（宣伝方策）を学んだ、広告代理店会社の博報堂の元社長である瀬木さんの影響かと思いますが、宗教が商品化されていると思います。このことについて森島さんはどう思われますか。

【お答え-6】〔正しい宗教の教えを積極的に広めることはむしろ必要なことだが…〕

五井先生の頃にも、著名人と会ったことを宣伝文句に使うことは全くなかったわけではありませんでした。地味でした。広告会社の元社長であった瀬木さんによって、白光真宏会は確かに広告が積極的になりました。これもあなたのおっしゃる通りだと思います。正しい宗教の教えを積極的に広める努力をすることは、世界が平和になることですから、これは決して悪いことではなく、むしろ必要なことであると思いますが、「宗教が商品化されている」とあなたに不快感を与えているならば、どこか改善すべき点があるのでしょうか。どこが商品化されていると思われるのか、どのように改善したらよいのか等をもっと具体的にご指摘して下さいれば、私どもも反省し、皆さんに歓迎されるような、よりよい普及活動をしてゆきたいと思っております。今後も助言提言をお寄せ下さいますように、お願い申し上げます。よいご質問をいただき、ありがとうございました。

質疑応答 2 : 「世界平和の祈り」だけを祈っているのは今や唯一会だけ！

【ご質問-7】〔宗教の違いに把われず、「世界平和の祈り」さえしていればよいのでは…〕

どんな宗教をやっても、「世界平和の祈り」さえしていればよいと聞いていたのですが、違うのでしょうか？

【お答え-7】〔世界平和の祈りが真に理解できれば宗教団体に幾つも入会する必要はない〕

あなたのご質問は、立場によってお答えの仕方が異なります。WPPSや五井平和財団の立場では「その通り」とお答えすることになりますが、一つの宗教団体である白光真宏会の立場では、「どんな宗教をやってもよい」というような無責任な放任した態度を取るはずがありません。「どんな宗教でもよい」ということになれば、白光真宏会など存在しなくてもよいということになります。

唯一会は、WPPSや五井平和財団のように「世界人類が平和でありますように」の一言だけを浅く広く普及するという役目の団体ではありません。唯一会は、宗教団体として五井先生の教義を徹底的に深く掘り下げて教義の理解に努めると共に、「世界平和の祈り」の行法を守り、五井先生ご在世の頃のご指導法を後世に継承する天命があるのです。浅く広く広めたり、ノーベル平和賞を受賞したりするのは、WPPSや五井平和財団にお任せして、唯一会は五井先生の教義を伝授する奥の院になるのです。

唯一会では、WPPSや五井平和財団と異なって「世界平和の祈り」の全文を唱えます。

世界人類が平和でありますように
日本が平和でありますように
私達の天命が完うされますように
守護霊様 ありがとうございます
守護神様 ありがとうございます

今やこの「世界平和の祈り」だけを祈っている宗教団体は唯一会だけなのです。

どの宗教団体を選ぶのも、どの平和活動団体を選ぶのも、個人の自由であり、他人に強制されてはなりません。その意味ではどの宗教をやってもよいのです。しかし、「世界平和の祈り」の意味が真実に理解できるようになれば、同時に幾つもの宗教団体に入会する必要はなくなるのではないのでしょうか。

参考：五井先生が、あなたに教えたこと

「五井先生があなたに教えたこと」をここに書きます。すべて五井先生のご本からの抜粋です。

.....

◆「我は神の子なり」と叫んでいても、神の子にはなれない

(『生きている念仏』 p.36 より)

自己の業想念をそのままにしておいて、「我は神の子なり、仏子なり」と叫んでいても、その神の子観、仏子観は、業想念波動の中での観念に過ぎないので、真実の仏の姿、神の子の姿が、その人の行為に現れてくることはないのです。

◆自己の思う通りになるという念力主義は光明思想の履き違え (同 p.38 より)

光明思想のはき違えのような、自己の思う通りになるという念力主義や、業想念と真我とを混合させて、「神の子だ」と威張っているような無反省な生き方も困りものです。

◆「人間神の子」に把われるな、「業因縁の法則」にも把われるな (同 p.147 より)

人間神の子とか、仏とかいって、神の子、仏に把われ、空といて空に把われ、業因縁を言って業因縁に把われるのが、肉体人間の習慣であります。私は、この把われを放つことに重点を向け、すべての想念をひとたび消えてゆく姿として見送らせると同時に、その想念を神仏(守護の神霊)の方に転じさせて、把われなき生活を、この世に顕現せしめようとしているのであります。

◆「誰をも神の子として拝め」とは五井先生は教えてはいない（同 p.176 より）

悪いことをしている人を、「そのまま神の子として拝め」というのではない。神の子の現れるための、業想念の消えてゆく姿として、その人の不都合な想念行為を見てやる。そういう想いで見ようとしても、自己の心に憎しみや妬みや怒りの思いが強くて、消えてゆく姿と思うことができなかつたら、そうしたすべての想いのままで、世界平和の祈りをなさい、というのです。

◆高い理想を説いても、かえって自らの心を責めさいなんでも

（『光明をつかむ』 p.42 より）

日常生活をそのままにして、この一生において、釈尊やキリストの説いた真理の奥深いところを行ずるということは、よほど上根の最も秀れた僅少の人々にしか、でき得ないことだ、と私には思われるのです。

キリストのいうように、上着を取る者があつたら、みずから進んで下着をも与え得る人が、この世にどれほどありましようか。また「右の頬を打たれたなら、左の頬をも出さない」と教わっても、恐怖の想いでそうするのではなく、寛容の心、愛の心で、そうした行為を為し得る人が、一体何人あるでしょうか。あるいは、美しい女性を見て、心をひかれぬ青年が、身心異常者でない限りは、滅多にあるものではありません。理想は勿論高いほうがよいでしょうが、その高い理想が、あたかも誰にでも達し得るように説かれていると、良心的な人は、かえって自らを顧みて、自らの心を責めさいなんでもまいかねません。

…金持ちの生活様式を、貧乏人がいくら聞いても、どうにもならぬと同じように、上根でない、宗教的に特別秀れた素質を持っていない人々に、宗教的天才の通ってきた道を説き、その天才の到達した境地になれ、と言っても、これは無理な話です。そこで私は、空ということ説くにしても、人間の理想の道を説くにしても、常に、一般大衆にでき得る方法で説くことに、心を定めているのです。特定の少数の人々だけしか通り得ぬような道では、この世における宗教者の役目が果たせない、と私は思っているからです。

（※注釈…聖書では「下衣（したぎ）を取らんとする者には、上衣（うわぎ）をも取らせよ」〔マタイ伝、山上の垂訓〕が正しい。この時代は、上衣は寝る時に、かけ毛布のように生活の必需品として用いたために、借金の担保に上衣を取ることは法律で禁止されていて、金貸しは借金の担保として下衣を取ったのである。）

◆真理そのものを行じてゆくことは実に難しいことである（同 p.66 より）

私は根本真理が、いかに真理であるとしても、一度に急速に、それを実施しようとする態度そのものが、真理に反すると思うのであります。一時から二時になり、春から夏になるように、この世の動きには、すべて順序というものがあるのであって、いつときに真理そのままが現れる、ということはないのです。…今日の現実生活は、自然そのまま、真理そのままを、行じ生かしてゆくことは実に難しいことであり、できにくいことなのであります。…いかなる真理といえど、押しつければ、それは不自由となり、真理ではなくなってしまうのです。真理とは、常に自由に行なわれるものなのであります。

天地万物に感謝する、ということでも、天地万物に感謝すること、その真実は、最高の真理への行為であり、それが日常行なえる人は、実に幸福な人であり、真の人間であります。ところが、この立派なことが、ひとたび、声に出る言葉となって、他人に強要された場合は、この内容が、まるで死んでしまうのであります。また、強要した人も、もはや感謝の人ではなくなっているのであります。

◆現世の人間は、まだ「神の子である」と大見得を切るほど、光明化してはいない

(同 p. 66 より)

人間は神の子であり、神そのものであるのは真理なのであります。それは、文字のよや、声に出る言葉で言うべきものではなく、その人の全人格、言語動作、全行為に現れるべきものであって、文字や、発声による言葉で言うのは、ただたんに、その真理につなげるための、一つの動作であるのです。それを、ことごと「人間は神の子なのだ、円満完全なのだ」と、他人の立場やおもわくを無視して、しゃべりまくって、自らの想いを満足させているような者があるとしたら、その人は、「行き過ぎた人」というべきなのであります。

神が現れる時には、愛となり、慈悲となり、真となり、美となり、善となり、調和となつて現れるのであって、ただ単なる、文字や、発声による言葉に現れるのではありません。その行為が、愛であり、慈悲であり、真であり、美であり、調和でなければ、その人は、神の子とは言いがたいのです。現世の人間は、神内部に蔵して、その僅かの光を外部に発光しているものであって、まだ「神の子である」と大見得を切るほど、光明化してはいないのであります。理想はいかほど高くてもよいのであります。その理想のみに把われて、理想と現実の差異を忘れ去ってはならない、と私は言いたいのであります。

.....